



人材派遣のそちから

Potential Energy Of Manpower Dispatching

2024 年 5 月 吉日

(株)コメット社

内報

第 72



目には青葉 山ほととぎす 初鰹 ~山口素堂~

花の盛りも過ぎ、若葉の萌える頃となりました。新年度が始まり、早ひと月が経ちました。春のさわやかな時期を味わう間もなく、季節は一気に夏に変わりそうです。感染症の流行もかなり落ち着きを見せてはいますが、産業医の先生によれば、体調不良を訴え診察に来られ陽性と診断される患者さんは、ほぼ毎日おられるとのこと。絶え間なく出現するさまざまな感染症との共生は、人類にとって永遠の課題のようです。

さて今回の社内報では、災害発生時によく耳にする「命を守る大切な数字」についてまとめてみました。

72時間の壁、90秒ルール…、災害時 命を守る「数字」!

【自然災害での数字】

能登半島地震では発生から 124 時間がたった 1 月 6 日夜に倒壊家屋から、93 歳の女性が救出されました。残念ながらおよそ一月後に亡くなりましたが、4 時間かかしの救出は「奇跡」として報じられました。

一般に被災者の生存率は発生から 72 時間(3 日)を過ぎると大きく下がると言われています。国土交通省のデータでは、阪神淡路大震災の発災当日の救出時における生存率は 75%ですが、72 時間を過ぎると 5%に低下しました。原因は脱水症や低体温症が延命を妨げるため、このようなところから「72 時間の壁」と呼ばれているそうです。



72 時間を過ぎて救出された人は、呼吸ができる、水が得られる、体温が保てるなどの環境にいた場合が多いそうです。こうした経験則から、救助に当たる方々は日頃より延命にかかわる「3 の法則」が災害時を想定した訓練をされているそうです。空気がないと 3 分、体温が維持できないと 3 時間、水がないと 3 日、食料がないと 3 週間しかもたないという生き延びるための目安です。

航空自衛隊の救助チームでは海難事故が起きると、まずの航空機がいち早く現場に向かい、浮き輪や水、食料などが入った袋を落として要救助者が生きる時間を延ばし、海上自衛隊や海上保安庁の本格救助につなげるそうです。人は海の中では長時間生きられないので、海難救助は時間との勝負なのです。



【人為災害での数字】

備えるべきは自然災害だけではなく。能登で本格的な救出活動が始まった 1 月 2 日、信じられない映像がテレビに映し出されました。羽田空港に着陸する日本航空機と海上保安庁



航空機が滑走路上で衝突・炎上しました。海保機は能登の被災地に救援物資を運ぶ任務を担っ

て

いました。海保機に乗っていた隊員が 5 人亡くなりましたが、日航機の乗客乗務員に死者は出ませんでした。乗客全員が無事であったことは、航空関係者が称賛するほど避難誘導がうまくいったからだと言われている。

この背景には「90 秒ルール」というものがあります。これは避難用の脱出シューター開いてから、90 秒以内で乗客全員が避難できるよう、航空機メーカーに求められている設計基準です。日本航空では全乗客の命を守ることを最優先とし、パニックを起こさない注意喚起や、必要に応じて乗客の中から援助者をお願いするなど、最短時間で脱出する訓練をしていたそうです。今回のケースでは 90 秒で脱出できる機能と乗務員への信頼があったからこそすべての命が助かったのでしょう。

人為災害は小さな不注意が招くことが多いと言われています。アメリカの損保会社が提唱した「ハインリッヒの法則」は、1 件の重大事故の背後には 29 件の軽微な事故、さらに事故寸前の 300 の異常が隠れているという経験則を伝えています。いわゆるヒヤリハット(ヒヤリとしたりハットしたりする危険な状態)が隠れているというもので、「1 : 29 : 300 の法則」とも呼ばれます。



人為災害の代表が火災です。能登半島地震で起きた「輪島朝市」周辺の大火災は、屋内の電気配線が揺れでショートした「電気火災」の可能性が高いそうです。ですから地震の時は、まずブレーカーを落とすことで、火災を未然に防ぐことができます。

また能登半島地震では道路が寸断され、外部から支援や救援物資入りにくくなるという課題がありました。災害後の生活を守るためにも自分の命は自分で守るといった「自助の備え」大切です。災害を想定した食糧備蓄は最低 1 週間分必要といわれています。自助ができて初めて共助が成立します。災害前の備えが災害後の自助を支えるのかもしれない。(日経新聞コラム参照)



編集後記

八十八夜は季節の移り変わりをつかむための雑節の一つで、二十四節気の立春から 88 番目の夜と



意味です。農家では八十八夜を過ぎれば晩霜（ばんそう・初夏のころに降りる霜）も終わり、気候も
することから、種まきや茶摘みなどの農作業の開始の基準としています。なぜ夜なのかというと、明
初めまで日本では、月の満ち欠けを基準にした暦が使われていたため、月の見える夜から八十八夜と
したそうです。ちなみに2024年の八十八夜は、立春が2月4日だったので5月1日(水)でした。